
僕らの自由、僕らの青春 5 One person holiday travel

シルヴィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの自由、僕らの青春5
One person holiday
a travel

【Nコード】

N68110

【作者名】

シルヴィ

【あらすじ】

今日は絶好のツーリング日和です。何もかも忘れて、海へ行こう

往路

「うにゃ〜行くぞ〜走るぞ〜飛ばすぞ〜！」

失礼しました。目が覚めた瞬間から僕はハイになっています。今日はわくわく日帰りツーリング。日曜日の午前7時00分。金曜日にこっそり学校帰りに「機関」の倉庫から乗ってきたバイクのキーを差し込み、暖機運転を始めます。最近の四輪では不要とも言われる暖機運転、しかし 1ギア付きのバイクは、ある程度暖気しておかないとエンストしやすくなります。その間にタンクバック（ガソリントランクの上に磁石でつける四角のバッグ）の荷物を確認。今日は快晴だとわかってはいるのですが、雨天時に使用するゴアテックスのオーバードパンツ、帽子、地図、財布、カメラ、携帯：今日は電源を切っておきましょう。森さん、ごめんなさい。先に謝っておきます。そして免許証。実はコレ、大声では言えませんが「機関」から交付されている複数の偽造免許証のうちの1つです。今、僕が手にしているものは、生まれ年が改ざんされて、なぜか僕は20歳。しかも、なぜかクルマの運転もできるようになっています。ちなみに、クルマの運転はただいま「機関」で特訓中。一応それなりに運転はできるのですが、新川さんから路上運転の許可が出ていません。「あの〜新川さん直々に指導してくださいるのは、非常に嬉しいのですが、ラリー走行ができるまで許可が下りないのであれば、18歳になつたらすぐ教習所へ行くほうが早く免許が取れそうですね。え？バイクですか？中3で路上デビューしました。「機関」で最初から大型二輪車で特訓したので、自信はあります。いやあ、あの時は多丸さんたちにしごかれましたよ。特訓中はよく転倒しました。あの頃はケガだらけでした。おまけにオフロード走行まで特訓させられました。どう考えてもオフロード走行は多丸兄弟の趣味にしか思えないのですが、裕さんと2人で、こっそり林道キャンプツーリングに行ったことはいい思い出です。ランタンの火を眺めて、お互いにたくさん

のことを語り、たくさんのお話を聞きながら、天の川を見た夜。ヒマさえあれば天体望遠鏡で夜空を眺めていた幼い頃を思い出して、初めて「機関」の人の前で泣いた夜でした。エピソードとしては結構いい話に聞こえるのですが、これ、中3の頃の思い出なのです。あはは、当時、僕は偽造免許証さえ持っていない、本物の無免許ライダーでした。

北高そばの住宅にある倉庫。そこに1台の車とこのバイク、そしてオフロードバイクが1台ずつ保管されています。閉鎖空間が発生したとき、迎えが間に合わない、かつ、徒歩では現場に到達できないときの緊急移動手段です。したがって、バイクは出来るだけ早く乗れるようになる必要があります。実際にバイクで「閉鎖空間」に急行したこともあります。その「技術」を悪用(?)して、僕は時々、バイクを気ままに乗りまわして遊んでいます。この子の行き先がいつも「閉鎖空間」の入口ではあまりにも可哀想。平凡な生活を捨てることになった僕と、ひたすら倉庫と「閉鎖空間」の入口の往復しかできないこの子、たまには、僕もお前も、ただの「僕」と「バイク」に戻ろうよ。一緒にどこかへ行こう！

どうせガソリン代と高速代は僕持ちだし、誰も 2タコメーターなんかチエックしないからバレない。あ、でもこのバイクは車検があるからバレるもしれないけど、どうせ 3車検は来年だ。バレないバレない、と信じましょう。

愛用のバイク用ロングジャケットを着て、ヘルメットを被り、その他装備を整えて準備は完了。

(さあて、今日も飛ばしますか。)

僕はタンクをポンと叩いてスタンドを払い、発進。まずは高速のインターへ。今日は吉川ジャンクションから舞鶴若狭自動車道に入って一気に日本海を目指します。関西以外の方や道路に明るくない方にとっては、この先、非常にローカルかつ難しい話になりますので、オンラインマップなどを併用していただければありがたいです。

さて、大型バイク＋高速道路とくればやることは1つ。アクセル全開！空冷4気筒のエンジンが心地よい重低音を響かせます。僕の大
事な相棒、4「YAMAHA XJR1300」、今日もよろしくお願ひします。

加速車線から一気にアクセルを回し、本線に合流する頃にはいったいどれぐらいのスピードが出ていたのでしょうか。いや、そんなことは気にしない。どうでもいい、些細なこと。本能が求める速さを右手が瞬時に判断してアクセルを回していく。それでいい。空気を切り裂いて僕と相棒はひたすら北へ。風でバタつくジャケットの音、響きわたる高い風切り音、いつしか僕とバイクだけが見える世界が広がる。横の景色なんて全く見えないし、眼中にない。バイクはスピードが上がれば上がるほど視界が狭くなる。危険といえば危険だけど、この狭い世界、空気を切り裂く音と、さらにスピードを求めるエンジンの振動と重低音。

「こい、古泉一樹。もっとアクセルを開ける。もう限界か？怖いのか、坊や。」

「まさか。お前こそ、この程度でギブアップか？冗談は程ほどにしてくれよ。」

常識と理性がどんどん後ろに追いやられ消えていく。僕とこの子、狭い世界の中、固い絆の上で繰り広げる挑発合戦。

「さあ、曲がってみろ。突っ込んでみるよ。お前はついていけるか？」

「お前こそ、僕についていけるか？ここで勝負だ！」

前方のカーブでこの子は僕に勝負を持ちかける。ここで少しでも「恐怖」を感じれば僕は道路に叩きつけられるのはわかってる。だけど、僕は殆ど減速をせずカーブに突入する。自然と傾く視界。スピードとバイクの角度が絶妙のバランスをとり、タイヤが路面に食いつく。まるで物理の教科書にでてくる見本のように力のバランスが取れている。このバランスが少しでもずれたら終わり。このスリ

ルはたまらない。そして、カーブを抜け出すときに再びアクセルを開けて味わう加速。もう誰も止められない。止めさせない。僕もこの子ももう止まらない。ちょっとした普通車と同じ排気量のエンジンが軽やかに音を響かせ、まるで「主役はバイクだ」と言わんばかりに空気を裂いていく。

強い風と音。すべてが一緒になってこの子はさらに僕を誘惑する。僕とこの子だけの世界に誘い、やがてこの子は容赦なく加速重力を僕に与え、僕を振り落として1人で走ろうとする。僕がいらないとお前は立つこともできないくせに。スタンドを払えばお前はすぐに倒れる。僕がいるから真っ直ぐに立てるのにどうして、僕を振り落とそうとする？お前は1人で走ることができるのか？教えてくれよ。

「お前はそんなにアスファルトと熱いキスを交わしたいのか？せっかく僕は、お前と海を見ようと思っっているのに、冷たい奴だな。」この子はいつだってそうだ。アクセルを開ければ開けるほど、この子は1人で前に行きたがる。ライダーを振り落とそうとして1人で風の向こうに消えたがる。僕を後ろへ、後ろへ置いていこうとする。それは僕に対する挑戦か？ならば、この子に思い知らせてやるだけだ。無駄な抵抗はするな、と。

「どうせキスをするなら、僕は女の子のやわらかい唇がいい。アスファルトみたいな固くて苦いヤツとのキスなんぞ、絶対にお断わりだ。」

アスファルトと熱いキスを交わす、それは死神と添い遂げること。常にライダーの後ろには死神が乗っている。「死神と連れ添っている」なんていつてしまえば、ツーリングも神人狩りも一緒なのに、なぜバイクなら許せるのだろうか。許せるどころか、それさえも快感になる。

「なぜ、お前は「閉鎖空間」が怖くて「高速道路」は怖くない？似たようなものだろう？神人のかわりに他のクルマがいるだけで、「閉鎖空間」も「高速道路」も似たようなものではないか。」

「愚問だ。そんなことはどうでもいい！僕はただ望むままに走るだ

けだ！さあ、ついてこい！この程度ギブアップしたら、自慢の四気筒エンジンを泣くぞ！」

「相変わらず生意気な子供だ。お前こそこの程度で怖がるなよ。」
「望むところだー！」

高速を走り続け、途中のSAで朝食をとり、外で一服しながら休憩していると、自然と見知らぬライダー同士で会話が始まります。バイクのこと、ツーリングのこと、美味しいお店や温泉のこと、危険な目にあつたことを自慢する「武勇伝」の披露。ここでは自分を偽る必要はありません。ありのままの自分であることができます。これが楽しいのです。ただ、バイクに乗ってこの場にやってきたというだけで、昔からの友人のように話せるのですから、本当に不思議ですね。

「ふわあゝ。少し眠いな。」

「どうしても高速は眠たくなりますよね。単調ですから。」

「あ、俺かなりヤバかったことある。」

なんて会話を交わした後、ライダーはそれぞれの時間で再び旅立ちます。途中のインターから5マスツーリングの団に遭遇。でもライダーは常に孤独。どんなに集団で走っていても、走行中は誰とも会話もできません。

でも、僕にとつて、その孤独はとても心地がいい。こんな心地いい時間、誰にも邪魔されたくない。でも眠気も若干襲ってくるわけだし。バイクは体がむき出しだから眠たくならない、なんてことはありえません。バイクでも容赦無しに眠気は襲ってきます。眠気覚ましには、7メット内カラオケが一番です。ガンガン知っている歌を歌いましょう。真夏の高速で「津軽海峡・冬景色」でもいいじゃないですか。誰も聞いてなんかいません。

しかし今日はラッキーです。休日なのに高速はガラガラ。ミラーにも8男性2人乗りの88ナンバー乗用車は写っていません。この瞬間を待っていました。アクセルは全開！シフトは最終の5速に

イン！

さあ、見せてくれ。僕だけに見せてくれよ。お前の真髄を存分に見せてくれ！

これ以上の高速シフトはないことはわかっているけども、9幻の6速を指してついつい左足ペダルを蹴り上げてしまう。

前方に大きなトラックの集団。黒い排気ガスを出しながら必死で走っている。僕達ライダーは、むき出しの体に排気ガスを浴びて走るから。決して綺麗ではられない。染み付く排気ガスとガソリンの香り。でも、その汚れや匂いは愛しいとさえ思える。ジャケットに染み付く香りはライダーの歴史。時には苦く、つらく、命の危険さえ感じるときもある。それでもライダーは愛車とともに走り続ける。ああ、道をふさがれる！今の僕は「かまいたち」だ。空気を、道をふさぐものすべてを切り裂いて僕は前へ走る。アクセルが荒っぽくなってもいい。事故らなきゃいい！誰も邪魔をするな！僕の前に立つな！空冷4気筒のエンジンが唸りを上げる。ごめん。少しだけ我慢してくれ。わかっているさ。お前にここまでさせることは酷であることはわかっている。だけど、許してくれ。少しだけ辛抱してくれ。

「どけえええええ！邪魔だ！」

そうやっているうちに、目的の舞鶴西インターが見えてきました。高速道路を下りて市街地へ。しっかりとスピードメーターで確認しながら減速して、国道27号を東へ走り、造船所と海上自衛隊の諸施設を眺めながら、今日の目的地、舞鶴港・前島埠頭に到着しました。ここは関西から北海道へ向かう10新日本海フェリーが発着するところです。夏になれば北の大地、ライダーの憧れであり聖地でもある北海道を目指して多くのライダーがこの港に集います。僕は駐車場にバイクを止めて、ヘルメットを取りました。髪の毛がヘルメットに押しつぶされてみっともないですね。でも、帽子を被れば大丈夫。すぐに隠せます。あるいは、頭にバンダナを巻いてもい

いでしよう。そして、車が飛ばす小石、バイクの空気に巻き込まれてバイクやライダーに叩きつけられ命を落とす哀れな虫たち、ライダーから容赦なく体力を奪う走行時の風から僕を守ってくれたジャケットも脱ぎます。ふわりとただよう排ガスとガソリンの香り。僕とこの子が一緒に走り続けたという証明です。

自宅から、朝食をとったとき以外は、ずっと走り通しなので、久しぶりの解放感を味わいます。僕を癒すように海の香りが優しくただよってきました。そして眼前に停泊している大きな客船。「あかしあ」か「はまなす」、どちらでしょう。まあ、どちらであっても行き先はただ1つ。北海道小樽港。21時間の船旅。時速60キロ前後で日本海を疾走する巨大高速船です。

「何もかもが終われば、僕はこの船に乗ることができるとはだろうか。

ライダーの聖地、北海道。いつしか僕もこの船で北の大地へ行きたい。自分で買ったバイクで北海道を走りたい。日本海を隣に原野を越えて北の果てへ行きたい。いつか必ず実現させてみせますよ。普段は、ダイヤの関係上、日中にフェリーは停泊していません。フェリーを確実に見ることができるのは21時以降。日中に見ようと思えば運休日を狙うしかありません。偶然にも今日は日曜運休。このチャンス逃すまいと思い、ここまでやってきました。舞鶴から北海道小樽へ行くこのフェリー、本当に大きく、白い船体がとても美しいフェリー。まあ、これぐらい船体が大きくないと、冬の荒波には勝てないでしょう。

「綺麗な船……。いつか僕もこれに乗って北海道へ行こう。必ず北海道へ行く！」

そう。すべてが終われば。誰にも言わずに行方をくらませてこの船に乗ってしまったもいい。「謎の転校生」は高校卒業後、謎を残したまま消息不明となる。最後まで「僕」を演じ、カーテンコールを告げることなく、消えていく。「僕」に相応しい最期だ。消えるように死んでいく「僕」をこの港に葬って、本当の僕が北へ向かって旅

立つ。僕は想像するだけで鳥肌がたってくる。

「お前は どう思う？」「僕」の最期はきつとそんな最期だと思っけど。

「

この子は高速道路を下りた瞬間、無口になってしまいました。そのかわりに僕の妄言や愚痴をだまっで聞いてくれます。

「ああ、風がでてきましたね。」

11ツーリングマップルのページが捲れる音が聞こえました。少し強めの風が海から吹いて来ます。さて、存分にフェリーを眺めた後、僕はどこへ行きましょうか。こういう時は、地図と相談しましょう。宮津方面へ行くか、舞鶴の奥のほうまで行くか、どうしましようかねえ。行き当たりばったりでルートを決めて走ることができないのはソロツーリングの大きな特権です。迷ったときはまず一服。そうそう、遠くへ来ると好きなときに一服できるのも嬉しいものです。本当はやめるべきものですが、まあ、それも自己責任ということで見逃して下さい。フェリーを眺めながら決めた次の目的地、パターンといえばパターンですが、宮津方面へ走りましょう。天橋立は混雑しているから、ここは通過しようか、やはり海を見ながら走るか。思案のしどころです。そうそう、宮津市内にロールケーキの美味しい店があるのですが、オートバイではきれいな形でロールケーキを持って帰ることができません。カットされたロールケーキも売っているのです、それを買ってその場で食べるのもありですが、結局カットされたロールケーキを丸々1本分食べてしまいそうです。ならば1本食べつくしてもいいかな？うーん、でもいくら旅先でもそれは見苦しいですね。残念ですがロールケーキは諦めて、そのまま宮津市内を通過し伊根の舟屋を見てから南に進路をとることに決めます。

しばらくは海ではなく、由良川を見ながら走ります。一見雄大で静かな川に見えますが、昔からの暴れ川で、大きな水害を起こすこともあります。あ、鉄橋に列車を発見！ディーゼルエンジンがいい音を聞かせてくれます。早く海が見たいという欲求を辛抱して、国道

を走って行くと見えてきました！日本海。しばらくは鉄路と海が僕たちにお供してくれます。やがて海と鉄路と一度お別れして、トンネルを抜けて走り続けると、宮津市内です。一気に景色が広がり、再び海が見えてきます。僕は、さらに国道を西へ。やはり海沿いを走りたいので、人が多いことは承知で、天橋立方面に進路をとりまです。さすがは日本三景、天橋立。観光客が多いですね。さらに丹後半島の奥へ向かって走り、伊根にある道の駅へ向かいます。海沿いの道。いつしか車の数も減り、気がつけば僕ひとり。無職透明な風がほんのりと緑色に見えます。あえて体をむき出しにするという危険と引き換えに得られる太陽の光、風、空気、匂い、音を全身で感じる喜び。ライダー自身の命をチップにして、全身の感覚すべてが研ぎ澄まされていき、狂おしいほどに感じる「生きている」実感。

今、僕は、確かに生きている。今、僕は、とても幸せだ。

次第に狭くなっていく国道、伊根の町が近いことを教えてくれます。でも、普通に道を走っているのは舟屋の景色はあまりよく見えません。舟屋は海に面した漁船のガレージ。一望したいのであれば、小高い場所にある道の駅から眺めるのがおすすめです。町内の道は非常に狭いので中心部へいく場合は気をつけて。町の中は、舞鶴や宮津と違って、漁村の景色が広がっています。ついでに簡単な食事。ツーリングに出ると、ついつい食事水分補給も忘れて走ってしまいます。食事はともかく、水分補給は充分にしましょう。目的地にいたら口も唇もカラカラになっていること、ありませんか？ヘルメットをとり、ジャケットを脱ぐのが面倒というのがありますが、一旦走り出したバイクを止めたくないのです。止まりたくないのです。止まったら死んでしまいそう。赤信号で止められるのも嫌い。延々と走り続けたい。道が尽き果てるまで走りたい。自分自身が燃え尽きるまでアクセルを開けていたい。

ここでも、ライダーたちが休息をとりながら、舟屋を眺めています。

た。僕はまた一服しながら、彼ら、彼女らと、たわいもない会話を交わします。自分を偽る必要がない旅先の会話。背負っているものを全てを家において自由になれる瞬間。誰も僕のこと、僕の秘密を知らない人たちだけど、「ライダー」というだけで、なぜか長い付き合いのある友人のように互いに振舞える。「バイクの免許取得禁止」という校則に違反し、かつ警察に見つかったら 12 無免許運転で捕まるバイクに僕は乗っている。しかも偽造された免許証で。でもそれでも僕はこれをやめるつもりはありません。僕が僕でいられる瞬間を手放すつもりはありません。たとえ警察に見つかって、停学処分を言い渡されてもこの時間だけは誰にも譲りません。あげくに未成年には許されない喫煙行為。地元では絶対にできません。なぜなら、僕は「優等生」なんですから。あの高校で僕がやることはひたすら「同級生にも敬語を使う、いつも笑顔の温和で礼儀正しい優等生」であること。でも僕は決して優等生なんかじゃない。礼儀も正しくない。温和でもない。だから、北高の生徒がいないところで、偽りない自分を曝け出す。そんな時間もないと、やってられない。そうだろうか？とこの子に聞いてみる。だけど、高速道路以外では、この子は聞き役に徹してしまう。もし、この子が答えることができるのであれば、きつとこう言うだろう

「自分で考える。自分で決める。お前はライダーだろう？」
ライダーは孤独を好んで求める生き物。後ろに人を乗せてない限り、常にライダーは1人。だけど「孤独な時間」がたまらなく愛しいのがライダーだ。そんなライダーの末路は、北の大地を指し、海を渡ってまで孤独を味わい、1人になりたがる。
それでも、僕は思う。やはり1人は寂しい。本当は誰かと繋がっていたいと思うってしまうのは、まだライダーになりきれないお子様の証拠。ああ、どんなに大人っぽく振舞っても、見た目が大人に近くても僕は、やっぱり子供だ。まだ子供なんだ。

復路

おやおや、ちよっとセンチメンタルになりすぎましたね。せっかくの休日、ソロツーリング。センチメンタルになっている場合ではありません。遊び倒さないと時間がもったいないではないですか！道の駅を後にして、伊根の町に入ろうとすると、クルマやバイクが町の手前で止まっています。そこへ「バス先導車」とボデイに書かれた車から音楽が聞こえてきました。路線バスがくるようですね。伊根の道は非常に狭いので、先導車が音楽を鳴らしてバスがくることを知らせて、通行スペースを確保してからバスが進入します。今日はフェリーや鉄橋を渡る列車に続き、また珍しい景色を見ることができました。運がいいです。バスが通りすぎた後、町のなかへ。家の切れ目からちらちらと見え隠れする舟屋。僕は遠くから全景を眺めるのが一番良いと思っていましたが、ここで考えを変えましょう。いやいや、近くから見るのもなかなかいいです。海沿いにバイクを止めて、いったん降車して、ヘルメットをはずし、海を眺めます。優しい潮風。美しい海。底がはつきりと見え、小さな魚達が気ままに泳いでいて、貝は静かに海底から魚達を見守っています。大きな海の小さな宝箱。僕は、まるで海を初めて見た子供のように見入っていました。

「お、なかなかの男前だね。これ持っていきな。」

「え、で、でも…」

「いーから。持って帰りなよ、兄ちゃん。」

「だめですよ。お金をちゃんと払います。」

「いいんだよ。兄ちゃんはウチの人の次にイイ男だからさ。」

にぎやかな笑い声。あはは、どうやら僕は、海を見ている間に、港のお母さんたちに囲まれてしまいました。お母さんたちは、いっばい干物や海産物を僕にくれました。

「家に帰ったら彼女が待ってるんだろ？」

「あ、でも彼女たくさんいそうだから、もう少し持っていくか？」
「いえいえいえ。いい人もいないし、これ以上はバックに積みきれません。今度来るときは大きなバッグを持ってきますから、そのときはよろしくお願いしますね。ああ、最後に美人に囲まれてドキドキしましたよ！みなさん、いつまでも綺麗でいてくださいね！」
これ以上囲まれたらさすがに時間がなくなります。さあ、ここからもう南へ進路をとるか、もう少し西へ向かうか。あ、何だろう？美味しい蕎麦が食べたい。よし、半島の中に進路をとり、出石へ行きましょう。蕎麦を存分に味わってから、篠山経由で帰ることにします。海とお別れするのは惜しいけれど、また今度。この海は僕が守る。この海がある世界は僕が守りぬくから、ほんの少し待っていて。

「子供が格好つけるな。お前はもつと大人になれ。」
あれ？今一瞬、バイクが語りかけてきた…ような気がしました。

「だが、今はまだ子供でいい。」

子供と大人の違い、年齢よりも大人びた人、年齢のわりに子供くさい人、どれが大人なのでしょうね。

「小さな話だ。少なくともお前の前では、僕は僕の思うままに振舞うよ。」

少なくとも、お前が隣にいるとき、僕は自由だ。お前がどんなに僕を振り落とそうとしても、僕は離してなんかやらない。

「行くぞ。相棒」

僕はヘルメットの中であの歌を口ずさみながら山の中を走っています。あの歌とは、もちろん奥田民生の「イージュー・ライダー」のんびり口ずさみながら一路出石へ。人は多いでしょうが、出石の蕎麦が僕を呼んでいます。なぜか、今日はたくさん食べてしまいそんな予感がします。だけど、食べすぎると

13 大変なことになるので（バイク雑誌で見たのですが、盛岡のわんこそばで「失敗」する人、割といるみたいですね）蕎麦の量は

ほどほどにしておきましょう。出石で蕎麦を堪能した後、僕は和田山に向かい、道の駅に併設された温泉で汗を流した後、一路篠山へ。申し訳ないですが帰り道は、バイクの特権「すり抜け」を存分に活用させていただきました。まったく、いつものことながら 14 国道 9 号線の渋滞には閉口します。ひたすら路肩を走って、自宅マンションに無事到着。駐輪場にバイクを止めて、盗難防止用のロックをつけます。エンジンを切った後も、鐘のような音を規則正しく奏でる空冷 4 気筒の美しいエンジン。まだ走ろう、走り足りない僕を誘惑します。ごめん、もう終わりだ。明日、お前を家に連れて行く。あと少しだけ一緒に走ろう。僕はそのまま学校へ行くから。また、お前とどこかへ行こう。城崎や竹野あたりでどう？但馬コースタルロードを走って餘部鉄橋でも見に行こう。

翌朝、僕はブレザーとネクタイを突っ込んだ通学カバンを防水バッグに入れて（カバンをそのまま後部座席に積んだらライダーが北高の生徒であることが一発でバレてしまいます。）シャツの上にライダースジャケットを着て、ほんのわずかな道のりのツーリングを楽しみます。そして「機関」が所有する倉庫にバイクを片付け、ジャケットとヘルメットを棚に置き、制服に着替えて、偽造免許証を返します。

そして僕は「笑顔の優等生」の仮面が剥がれていないことを確認して学校へ向かいました。

さて、次回はどこへ行きましょうか。今回は海を堪能したツーリングでした。今度は 15 セロー（YAMAHA SEROW 250）で、16 氷ノ山あたりの林道を走りにいきましょう。山の中で未舗装路を駆け抜けましょう。あ、その前に「免許取れ」なんて言わないでくださいね。まだ僕は 16 歳にもなっていませんから。

解説

用語解説

1 ギア付きバイク：マニュアルミッション車と同じように、半クラッチでギアを繋げて発進し、スピードに応じてギアチェンジしていくオートバイ。オートバイのクラッチは左手レバー、シフトチェンジは左足ペダル。自転車のブレーキと同じ動作で、クラッチを切り、ペダルを左足で操作してシフトチェンジしていく。オートバイのブレーキは右手レバーが前輪、右足ペダルが後輪。バランス維持のため、前後のブレーキが独立している。それぞれのブレーキの特性を理解しておかないと激しい転倒をやらかすので注意。

2 タコメーター：車やオートバイの、トータル走行距離を表示するもので、操作はできない。中古車・オートバイを購入する際の大事な指標となる。たまに巻き戻してトータルの走行距離をごまかす悪質業者もいるので注意！

3 車検：排気量が400CC以上のオートバイは四輪同様、2年に1度、車検がある。250CC以下（ニーハンとも言う）だと車検は不要。このクラスのオートバイは燃費もよいモデルが多いため、非常に経済的だが、どうしても車両点検を怠りやすく、車検がない故に、法律で義務付けられている自賠責保険が切れているのを見落としてしまいやすい。長距離ツーリングに行く前は必ず点検に出そう。

4 YAMAHA XJR1300：ヤマハ製の国産大型バイク。排気量が1000CC（1リットル）を超えたバイクはリッターバイクと呼ばれる。ここでは「僕の大事な相棒」と古泉君は嬉しそう

にしているが、免許証偽造はもちろん、古泉君がこのオートバイでツーリングに行くこと自体が違法。

5 マスツーリング：集団ツーリングのこと。単独ツーリングはソロツーリング、2人乗りはタンデムと言う。「僕らの自由、僕らの青春」シリーズの1話は古泉君とキヨンの「タンデム」ツーリング、今回は古泉君の「ソロツーリング」ちなみに高速道路のタンデム走行は平成17年に解禁されたが、今でも首都高速の一部区間では2人乗り禁止の区間がある。

6 走行中は会話不可能？…ヘルメットにつけて使用する専用無線もあり不可能ではない。

7 メット内カラオケは誰も聞いてない？…オープンカーのドライバーには丸聞えなのでご注意。

8 男性2人乗りの88ナンバー乗用車：覆面パトカーの可能性が高い。88は特殊車両につけられるナンバーであり、ゴミ収集車や、消防車・救急車・パトカー等の緊急車両にもつけられている。高速道路ではスポーツカーの覆面パトカーが走っていることもある。常にスピードは控えめにしよう。大型オートバイは簡単にスピードがでる。古泉君が乗っているバイクは、国産なので、スピードのリミットは時速180キロだが、恐らく高速では、時速150キロぐらいで走行しているはず。ここで警察に見つかったら、彼の罪状はスピード違反だけでは済まされない。

9 5速・幻の6速…5速は高速走行時に使用するシフト。古泉君の乗っているオートバイのシフトは5速まで。スピードが上がるのと、5速に入っているのを忘れてシフトチェンジしようと左足ペダルを蹴り上げてしまうことがある。だから「幻の6速」。もちろん、

6速があるオートバイもある。

10 新日本海フェリー…主に関西以西のライダーが北海道へ渡る際にお世話になるフェリー。舞鶴・新潟から小樽へいく直行便、敦賀（福井県）から苫小牧東へいく直行便と新潟・秋田を経由して苫小牧東へ向かう寄航便がある。舞鶴発着のフェリーの愛称は「はまなす」「あかしあ」。

かつては南行きフェリーが15時30分ぐらいに舞鶴港に到着したので、夕方になれば停泊しているフェリーを見ることができたが、高速フェリーが就航した平成16年以降、南行きフェリーの到着が21時になったので、現在、舞鶴港で日中にフェリーを見ることができるのは運休日だけ。しかも日曜日の運休は非常に少ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6811o/>

僕らの自由、僕らの青春 5 One person holiday travel

2010年11月3日06時44分発行